

養老先生の

七か七時 人間学

〈解剖編〉



ふつうに耳と呼ばれて

いるのは、耳たぶがついた、外から見える変な形のもので、全体を指して「耳介」といいます。耳介を触ってみると、耳たぶ以外は弾力があつて少し硬いのですが、骨ほど硬くはありません。耳介のなかには軟骨が入っています。耳介を触った感じが、軟骨の硬さだと思えばいいのです。

その先には耳の穴があります。耳の穴は「外耳道」といいます。耳介と穴を合わせて、「外耳」といいます。耳は外耳、それから「中耳」「内耳」という、三つの部分

集めて伝えて感じる耳

からできています。外耳が音を集め、中耳が音を伝え、内耳が音を感じて脳に伝えます。

外耳道の突き当たりが鼓膜です。鼓膜は中耳と外耳の境になります。

哺乳類以外の動物を見ると、耳の位置がわからないでしょ。じつは耳介は哺乳類にしかありません。ヒキガエルをよく見ると、耳の部分に丸い円盤があります。これは鼓膜です。鼓膜がじかに外に出てくるわけです。両

生類には耳介も外耳道も

ないのです。

は虫類、つまりヘビやカメでも同じです。ヘビはカエルと違って、鼓膜がありません。でも耳がないわけではありません。哺乳類なら鼓膜にくっついて、音を伝えている中耳の骨が、ヘビでは下あごまで伸びています。ヘビはあごで音を感ずるわけです。

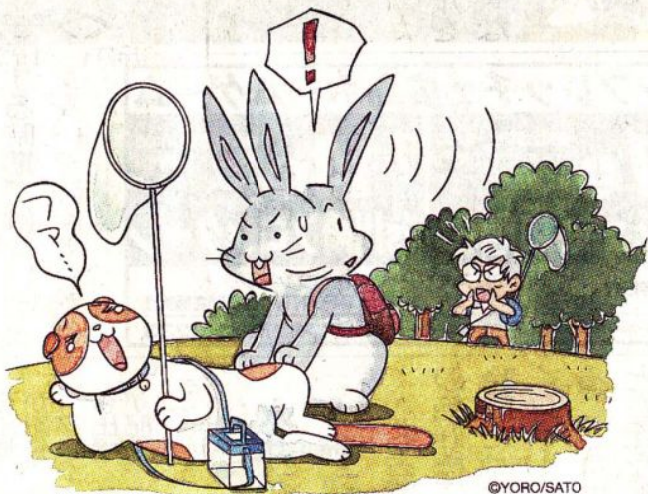
外耳は音を集めるはたらきがあつて、ウサギやコウモリの耳は、それですごく長いのです。

魚も外から見える耳はありません。でも内耳はあります。コイやフナはウキブクロを利用して音を聞くのです。

(養老孟司 解剖学者)

クリツク

鼓膜(こまく) 音をキャッチして振動(しんどう)する、直径9ミ、厚(あつ)さ0.1ミほどの、円形のごくうすい膜(まく)。その振動は、鼓膜の内側にある「耳小骨(じしょうこつ)」という小さな骨をへて、内耳(ないじ)へと伝わる。



©YORO/SATO

(イラスト・佐藤学)